ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

もう一度「銀行質屋論」
（崩壊したビジネスモデル）

最近、ある出来事を通じて「銀行はやはり衰退産業である」との認識を強くした。金融業一般が衰退産業などとは思わないが、このままではたとえ不良債権が一掃されても既存銀行の衰退は止まらないと思わざるを得ない。

ある中小企業が前向きな設備投資をしようとした。その会社は私の認識では、バランスシート、損益、キャッシュフロー等から見てどちらかと云えば優良企業に分類されておかしくない会社であるが、接触した３つの銀行とも「担保」と「協会保証」を要求した。まあ現状それも仕方ないと思ったが、保証協会も物的担保を要求してきて、銀行が満足に抵抗できず協会の要求に屈してしまったことには驚き呆れた。保証協会の無担保枠の範囲、しかも制度融資利用であるにも拘わらず、この会社は設備投資で取得する物件を担保に差入れる羽目となった。

幸いにしてこの会社は借入債務が少なくキャッシュも潤沢だったので最終的な資金調達に齟齬を来さずに済んだが、前向きな資金使途であっても、担保なく協会保証なくては銀行から借入が難しいという現実を知ることとなった。

もう大分前のことになるが、三國陽夫さんがある雑誌で「銀行質屋論」を展開した。その論旨は、銀行は理念や建前を声高に語っているが土地という名の質草に融資を付けている「高級質屋」に過ぎない、というものだった（と記憶する）。それを読んだ時、私はずばり内実を指摘されたようでショックを受けた。私達がやってきたのは「質草の値付け」だったのか。経済の血脈である金融を担うことにより社会の発展に寄与する等と大袈裟なことを云っていたが、云われてみれば、上昇を続けた質草（土地）に乗っかって融資量を拡大してきただけではなかったか。

それから７、８年が過ぎたが、この間の銀行の動きは三國氏が説いた銀行質屋論が正しかったことを証明した。「質草」を頼りとした銀行融資業務は、低迷しているどころか全く将来を展望できない状況に陥っているのだ。

銀行と名の付く銀行（都銀、長信銀、信託、地銀Ⅰ、地銀Ⅱ）の貸出残高はピークから１００兆円以上減少した。あさひ銀行クラスの銀行が５つ消えた勘定になる（皮肉にもあさひ銀行もその名を消した）。何故貸出金はこれほど減ったのか。

減少の理由として公式的に、①不良債権の処理、②資金需要の低迷、③バランスシートの調整、等が挙げられているが、本当の理由は「質草が値下がりした」ことにあると私は見ている。

今、中小企業が銀行に行って借入の相談をしたら、十中八九「担保」「協会保証」「第三者保証」を要求される。この要求は質草に頼る体質そのもので、バブル崩壊以降も全く変わっていない。それどころかリスク管理という名の元に一層強化されているようにさえ見える。これで貸出市場が拡大したら奇跡である。

最も中心的な質草であった土地の値段の下落と金融機関の貸出残高の減少は、おそらく重なっている。現在、ＴＶやマスコミで銀行を巡るホットな議論が展開されているが、私には一つの重要な視点が欠けているように見える。それは銀行の「ビジネスモデル崩壊」である。

日本の銀行が構築したビジネスモデルは、簡単に云えば「担保や保証を取ってリスクを最小化しながら貸出で利鞘を稼ぐ」というものである。今もそのビジネスモデルの基本を変える様相は見えない。銀行界の視野には「担保や保証に依存しない融資」などという発想はない。それはそれで一つの見識だが、このビジネスモデルは、担保や保証の効力が衰え、しかも産業構造の変化によって担保を持たない企業が勢力を伸ばしてくる時代にあっては徐々に通用しなくなる。だからこそ不良債権に苦しみ貸出残高を減らし続けているのではないか。

将来を展望する時、旧来型の銀行融資は衰退に向かう（と思う）。もちろん担保・保証による融資システムも一定のシェアを持つだろうが、その規模は徐々に縮小する。これは銀行に資金調達を依存する企業にとって大問題である。

不良債権処理が終われば銀行は再び積極的に融資を行うなどという議論もあるが、質草頼みの融資を続ける限りそれはあり得ない。この壁を突き破るものは何か。少なくとも、間接金融（銀行）の役割を異常なまでに高めてしまった日本型金融システムは間違いなく岐路を迎えている。

《複製・転載等はご連絡下さい》　TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp